
異世界は焼肉のあとで

さい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界は焼肉のあとで

【著者名】

Z5507S

【作者名】

さーこ

【あらすじ】

金曜夜の残業明けのヒロインが、自分への「褒美ひとり焼肉後に、うつかり異世界トリップ（仮）をしてしまう話。女主人公モテ・ご都合主義展開です。

(前書き)

お約束かつ趣味全開のキーワードで『楽に書いてみました。』

「今日は」そばガツツリ肉焼いて食べてやる。」

「生ビールをグラスで！ 上カルビ上ロースタンミノ大根キムチ、あ、特選レバーもお願いしまーすひとまずそんだけ」

焼肉屋でテンションも高らかに注文した私、その行為自体は決して悪ではないと思う訳です。

例えそれが周囲のマナザシ痛い、おひとり様焼肉でも……コレ本人は肉を焼くのに忙しいから、心情は見かけほど悲惨じゃないんですねよ本当に。

私こと樋岡まどか（たておかまどか）が、独身二十八歳女性でも、本当に。

だいたい金曜夜の残業帰り、わが身に「褒美を」「えるのはこれ当然の成り行きではないですか。怒涛の一週間を乗り切つて土日休みをもぎ取つた自分、偉いっ！（お若い方々、いい大人は自分で自分を褒めてやる必要があるのです。何故であれば他に誰も褒めてくれないからね）

最近碌なものを食べていないカッサカサの精神とお肌に必要なのは、ジユウジユウと炎を上げて焼ける肉ですとも。眼鏡に脂が飛んでも気にしない。

「追加でビールもう一杯！ あと、にんにくホイル焼きもねつ」

とつこの昔に成人済みですから、アルコール摂取は合法、徒歩三分の自宅へ帰るのに飲酒運転などとたわけた真似をするはずもございません。

「……では金額確認の上、こちらにサインをお願いいたします」

「『』うそつをまー～」

お腹一杯大満足、お支払いはクレジット一括引き落とし、高級店とはいえひとりで八千八百五十一円は頑張り過ぎたかしら。サイン

—51—

パンツスーツにたつぱり備長炭の煙を吸わせ、ミントガムを貰つて意気揚々と店の自動ドアを潜つたところで。

私は異世界に飛んだ（仮）。

六

焼肉屋から足を踏み出した途端、周囲の音が、気温が、明るさがガラリと切り替わった。

街灯に弾かれる車のタイヤの音が、突然囁きの反響する暗かりに取つて代わる。私は状況に付いてゆけず、きょとんとその場に立つ立つていた。

感覚は言つなればアレ。子供の頃、急性虫垂炎で全身麻酔の手術を受けた時に似ている。

頼りない手術着で、アアこれから手術だ麻醉するんだ～～と思つた次の瞬間、全てが終了してお腹に縫い糸つきでベッドで寝ていた感じ。まるで時間が切り取られて消えたような。神様に騙されたみたいな、脳味噌がついていけない展開。

「え、でも、ひ、ひまつ……マグシマグシー」

その一瞬の隙に、私はフード頭の不気味な連中に周囲を囲まれ、壁まで無理矢理引っ張られて、ガチヤンと鎖で両腕を拘束された。

恐怖に真っ青になつて必死に抵抗しても時すでに遅し、あつさに

バックストラップのヒールも脱げてしまう。右手のミントガムも、肩掛けのバッグも床の向こうに飛んで、闇の向こうへフード頭達がそくささと消えてゆくのを啞然と見守るしかなかつた。この観察を余裕というなれ。私の思考の九十八%はパニック、残り一%くらいでこの独白をお届けしております。

…………。

なんですかこの状況。ストッキング一枚の踵に、床の冷たさが染みわたる。

どうやら繫がれた壁は若干カーブを描いていて、壁というよりとんでもなく巨大な柱のようだ。

それから左右に首を捻ると見えるシルエット、啜り泣きやがちゃがちゃ暴れる気配からして、どうも繫がれているのは私ひとりじゃないっぽい？

つるつるに磨かれた床や背中の柱は、大理石みたいな建材で出来ている。

天井は闇に消えるほど高い。だから鎖の音が妙に反響するんですね、なるほど。

背を柱に預け、腕を上に鎖へと繫がれた私。なんだかこれって絵画の『繫がれたアンドロメダ』みたいな？……いやいや私はあんな桃尻ぴちぴちのお姫様じゃないですね、はい。しかし古代神殿と柱と鎖かつ繫がれて置き去りときたら、現実主義者でいい大人の私も、なんだか不吉な連想しか沸いてこない。例えば、生贊とか生贊とか。

ところで、ここはどこ。焼肉屋の外？ もう一度聞きますが、なんですかこの状況。しかも眼鏡がずり落ちて、かゆいのにかけません。

「ぬが～～つ、ふんぬ～～！」

私はとりあえず疑問は置いて、不吉な前フリとしか思えないシチュエーションから逃れるべく、必死になつて鎖と格闘しましたとも。世間の風は冷たいのです。ただ泣いて助けを待つても自分にヒロイン役は割り当てられない現実を、デキる女はすでに直視しておりますとも！ 手首の皮を擦りむきながら、左右背後からも繫がれ仲間の努力の気配を感じてしばらく。

「ト、リ。

微かな物音に、はつと息を呑む音がして、闇が急に静まり返った。

「さやつ。で、で、で、出たーッ！……

丁度私の左手奥から、何かが足音もなくやつてきて……一度だけ、ずれた石床が小さく音をたてた。

必死にガン見すると、おぼろにあらわれた白い影の位置はもの凄く高かつた。で……でかい。牛よりでかい。馬よりでかい。象よりは、小さいかもしれない。それでもとにかく、私の頭より高い場所に、四足歩行のそいつの頭があるのは間違いない。闇に目がルビーのように光る。滑らかな動きはなんとなくネコ科っぽく、白銀の毛並みに黒いぶちが……詳しくないけど豹とかチータとかそんな雰囲気でしょうか。

明らかに、肉・食・生・物かと思われますつ。

左側のヒトが、必死で暴れて鎖が擦れている。そりやそりだよ。私だつて暴れますよ。『森で熊に出会った際、死んだフリをすれば助かる』といふのは嘘である』という聞きかじりの知識が、頭を駆け巡る。思い出したくもないので、あの俗信が何故間違っているのかというと、雑食あるいは肉食動物の場合、獲物が生きていようが死んでいようが内臓から食っちゃうんですつて！

その大型ネコ科っぽい生物は優美に身体の向きを変えて、柱の周りを巡ることにしたらしい。

左目の端、そいつの尻尾が消えてゆくのを見送りながら、ガタガタ震える。今度は身体の右半分に緊張が走るけれど、右と見せかけてやっぱり左から来るのがホラーと笑いのセオリー……笑えません！ と思つたら、普通に右にそいつの白い毛並みが現れた。早い。

背後の柱は大きそうなのに、めっちゃ早い。

「……ふおーつ！」

「ノオオオオオオーッ！ あっちいけー！ 丁度私の目の前で、そいつはぴたりと動きを止め、鼻先を宙でなぞった。そして間近で見

れば琥珀色の瞳を細め、まさに私へと向き直る。

ふんふんふん。

その大型ネコ科っぽい生物の顔が近づき、湿った鼻面が、硬く眼を瞑つた私の首筋近くに寄つた。目を閉じて必死に身体を縮める……でかつ。鼻面でかつ。髭がちくちく顔を刺して、なんだか匂いを嗅がれているらしい気配。なにこの生き物ほんとでかい。大自然の驚異？ 薄く開いた口から暖かい吐息が漏れるたびに私の眼鏡が曇る。というか涙で前が見えません。誰か助けて。こうなつてはもう、仕事での経験なんて何の役にも立たない。

「ごめんなさい、土下座して謝ります」「ごめんなさい。

妙齢のオナ「らしからぬにんにく臭でスイマセン、焼肉のタレ風味ですいません、煙と脂の匂い満載でスイマセン。だからお願ひ、嗅ぐのヤメテ。これは後付の匂いなんです、天然モノじゃないんです、私美味シクナイヨ。先日風邪引いたから抗生素質飲みまくりだよ、食べたらお腹壊すよ、あつちいつてー！」

フンフンフンフン。

押し当てられていた鼻面がふつと遠ざかり影が顔から離れても、安心はできない。もしかしてこれからガブリでしょ？ 口元をかいでいた鼻面が、少しづつ下がる。触れるか触れないかの距離で、首筋を通り、胸元、腹と辿つてゆく。目をぎゅっと閉じて喰らいつかれる覚悟をする……ブスッ。

「！？！？ ふひょ……」

やつてきた予想外の衝撃に、私はびっくりと身体を振るわせた。猫科にしてはちょっと長い鼻面が、パンースーツの、ま、ま、股下に突つ込まれた。いや実家の飼い犬コペはやりますけど、恐らく猫科生物はそんな事しないんじやないんですかつ（イメージ）。

クンクン、ふすつ、くいくい。

ちよつとおおおお。イヤンな感じの、とんでもないとこに熱い息が染みる。こ、こ、こ、こそばゆい！ でも壁と鼻面に挟まれて逃げられない。寒氣だかなんだか不明な原因で身悶え、鎖の下で肩

をくねらせる。

んやつ、と思わず声を出すと股下の鼻面が離れた、と同時に突然、耳元で吐息混じりのハスキーボイスが届いた。腰砕けになりそうな甘い重低音。

「オーア、ファナンギヤ……（ああ、いい匂いです）」「

まさに一秒前まで大型ネコ科っぽい生物がいた付近から、言葉が聞こえて、私は目を白黒させた。

あれ、なんだか急にずいぶんお顔の気配が小さくなつたような。それでも私より大きいけど。鎖に縛られたままの身体に長い腕が巻きついて、すりすりと髪に頬を寄せられる……あれれ？

「（ン、なんて堪らない香りでしそうか。僕はもう……ハア……）嗅がれても、焼肉の匂いですけどね！？ 魅惑のハスキーボイスが、なんか知らない言語でウニャウニャ言つている。

「（ああ、マスター。貴女が僕のマスターです。もう決めましたから）」

そしてなぜかその言葉が、私の頭の中でつるつると同時通訳されている。

それが聞き覚えのない言語であることはたしかで、だといつに意味がわかるのだ。同時通訳というには音声はだぶつてきこえないが、現象としては、私が英語の理解できるレベルの文章を読む際に、すぐ脳内で日本語として解されるのに似ている。大変不思議ですね。しかしそれより先に、アンタ誰ですか。なんか人間っぽいけど。

さつきまで同じ場所には、全然違う姿の生物がいたような？

「（マスター、貴女のお顔をよく見せてくださいね）」

目の前の誰かから顎に手をかけられた直後、後ろの柱の頭上にぽつと火が点つた。ちょっと、今、誰がスイッチいたんですか怖つ。怯えながら目線を上げると、目前にはネコ科巨大生物の代わりに、どんなイリュージョンだまごうかたなきヒトが立つっていた。長身の

割にちょっと童顔、女神様の如き美貌だけれども、硬い細身の身体からして恐らく男性。多分、私より年下だろ？か。浅黒い肌のちょっと見慣れない顔立ちは完璧に整つて、銀の前髪との色彩的な対比も素晴らしい。美形に毛穴などないッ。美形はトイレになどいかないッ……そんな感じに想像していただければ幸いです。

その美人さんは百八十センチは確実の長身をかがめて、すりすりと私の頭にいとしげに頬ずりをする。目元を桃色に染めてウツトリ微笑む表情は、やけに艶っぽかつた。

「（マスター、好き……）」

えーとマスターって私？ 自動翻訳サン、この訳あつてんの？ すりすり。なでなで。ちょっと備長炭臭がつきますよアナタ！

「（ずっと、ずっと、僕をこんなに切なくなるまで放つておくなんて、酷いひとだ。でも大好きです、マスター）」

「ちゅちゅ、すりすり。髪に唇を寄せて頬を撫でて、腰を抱き寄せてお尻をさわつと……コラコラコラ、なにやつてるんですかこの人。痴漢！ なんか痴漢に見えない痴漢がいます、ナチュラルスケベ怖い！

美形でなければオゾマシイ犯罪だ、いや顔は関係ないな、美形でも犯罪デス。唸り声を上げて抗議すると、口に張られた葉っぱに気付いてひつ剥がしてくれたは良いものの、

「ぶぱつ、ちょっと、ううつ……」

美しすぎる痴漢の君は首を振る私に構わず、ちゅ、ちゅっとやけに恥ずかしい音をたてて、髪に頬に口付けてくる。

これは恥ずかしい、二十八歳独身女子でも恥ずかしい、いや待て一体恥ずかしがつている場合なのか。相手は見知らぬ他人で得体の知らない馬の骨。しかも左右には生贊（推定）仲間が居ますよ。こんなコトしてる状況でも相手でもない、だいたいねちつこい愛撫に、微妙に性的なものを感じるのは自意識過剰のなせるわざではないと思つ。

「ちょっと、まずはこの鎖をはずして下さい、お願ひします！」

翻訳が双方向であることを祈りつつ、私は混乱の極地から懇願した。下手に出たのはヤマトナデシコの性（さが）、もあるけど相手を刺激しないのです。

かちあつた眼差しに、理解の色があるのを見る。

よし自動翻訳は双方向、第一閨門クリア。しかしその琥珀の瞳が熱を孕んで、一瞬勝機を見出したかのように細められたのは気のせいだと思いたい。

「（僕の名はシャルク。貴女が僕のマスターになつてくれば、どんなご奉仕でも……ふふっ）」

オイコラ翻訳者出て來い。なんか誤訳してないですか、なんでこんな無駄にエツロい言い回しなんですか。

動搖している間に、スルツと眼鏡を外されて、あのう現在私は油でお肌テカテカなんですけど。そのテカテカでアイメイクもはげはげのお肌を、うちゅうと吸われる。おいおい吸うついでに舐めた！いまこの男、舐めたああつ！

すりすり、うちゅうちゅ。ぺろり。

「（……ね？）」

拘束は条件つきでしか解いてくれないんですか！

甘々の表情を浮かべて、シャルクはさらに身体を摺り寄せてくる。頭がクラクラする。なにこの有無を言わせぬかんじ。

何気なくお尻揉まないでよ。あ、ちょっとやだ。あし……脚が、絡んで、ちょ、オマエツ。可愛くじやれ付くような雰囲気は計算だな、計算なんだろう貴様。腰がつ、ぴつたりくつついた腰が心なしか軽く揺するみたいなエロめの動きを。これ限りなくアール指定に近い、これは私二十八歳だけど絶対駄目ええーツ！

「ま、まで。ちょっと待つて、落ち着いて。まずはマスターつてなにするもんデスカ！」

しかし私も軽く世間で揉まれた人間である。踏ん張つた。どんな緊急時であつても、人間、安易に契約印を押してはイケマセン。

「（ただ、僕を食えさせないで。孤独にしないで。僕は元々愛玩用

の生き物ですからね、どうかマスター、いっぱい可愛がって下さい）

「ちょっと、頬を染めるなッ。それから何故に言葉遣いが卑猥なんだ、訳のヒトーッ！？ てかいやいやまでまで、貴方は何を常食としているんですか、もしかしながら貴方の正体はさつきのネコ科巨大生物だつたりしますよね、私のマンション狭いですし人肉とか欲しがられても困りますしつ」

「（僕が食べるものは、普通の人間の男と一緒にですよ？ 色々な意味で）」

額を肩に擦り付けていた顔がちょっと上がって、さらりと乾いた唇が、優しく耳の後ろを甘噛みする。頭蓋にはむはむぴちゃぴちゃと、もはや可愛らしいんだかイヤらしいんだか不明な音が鳴り響く。必死で足を突つ張つて引き離そうとしているのにむしろグッと抱き寄せられて、ああ駄目だ。もう駄目だ。なにこれ警戒心を抱かせないこの天然なエロエロっぷり。腰が抜けてしまつ。

「ん、ああ……あん、コラッ！」

「（マスター？）」

ひたと見据えてくる肉食獣の目。柔らかな微笑みの上で光る、獲物を甚振るような、愉悦の色。

ええと、冷静に考えれば恐らくアナタは焼肉の香りがお気に召したのでしあうが、わたしてて常時にこんな匂いじゃなくてですね。これでも会社勤めしてますし、今日は金曜の夜だから特別なんですよ。普段はどっちかといふと和食派です。焼肉は三ヶ月に一回がせいぜいですよ本当に。

ああ、せめて焼肉屋を出るのはミントガムを噛んでからにすべきだつたあああ。

ぐるぐると色々な事を考えたけれどもしかし、今焼肉の匂いについて正直に言つてどうなるのか。とりあえずこのケダモノ君を刺激しないように、拘束を解き状況説明して貰うのが大事ではないのか。私はからうじてそろばんを弾き、覚悟を決めて深呼吸、心を奮い

立たせ、相手の強引さにも負けずキッパリ毅然といつ返事をした。

「御要件は持ち帰り前向きに検討させていただきますッ！」

未だに完全には信じていないのだけれど、私達の吊るされた神殿は異世界にあつたんだとか。私および数名は異世界召還されてあの場所に居たのだと、あの大型ネコ科っぽい生物ことシャルクの手綱を握るために拉致拘束されたんだとか、犯罪の首謀者は異世界のとある糞政府なんだとか色々言うべきコトがある訳ですが、とりあえず逃亡と復讐と帰り道探しの前に、ひとつ教訓を垂れておきますよ。腰にしがみ付いて、ますたーますたー煩い不思議生物を邪険に扱いつつ。

皆様。くれぐれも異世界トリップ（仮）の直前は、焼肉を控えましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5507s/>

異世界は焼肉のあとで

2011年4月19日23時55分発行